



(調布市立調布第七中学校教諭) 山崎朋子 聞き手

一生懸命にを

幅広く愛される『翼をください』

山崎: 私は中学校の教師をしながら作曲もしていますが、村井先生の『翼をください』は、私が主宰する地元の合唱団のテーマソングです。『翼をください』は楽譜を見なくても誰もが歌える曲なので、合唱団のコンサートでは最後に歌うことに決めています。

村井:お客さんもいっしょにですか?

山崎:はい。コンサートではものすごく難しい合唱曲も、ポップスのアレンジも取り上げますが、『翼をください』は必ず歌います。ぜひこの曲の誕生したきっかけを教えてください。村井:僕は昔から合唱が大好きなんですよ。イギリスのウィリアム・バードや、もっと古いものだとグレゴリオ聖歌も好きです。それから僕らの若い頃は、フォア・フレッシュメンといったジャズ・コーラスのグループが活躍していたこともあり、とにかく合唱がすごく好きだったんです。それでレコードのプロデュースを始めた当時、最初に契約したのが「赤い鳥」という女性 2 人、男性 3 人のグループでした。

山崎:赤い鳥とは…

村井:いわゆるフォーク・グループです。フォークはギター



『翼をください』: 赤い鳥(シングル盤) ©ソニー・ミュージックダイレクト

1本あれば演奏できるので、当時、日本中の大学生がフォーク・ソングを歌っていました。赤い鳥はその中でも繊細なハーモニー感覚をもったグループで、山本潤子さんがソロを歌ってバック・コーラスをつけるスタイルだけでなく、全員で歌えるという強みもありました。僕はその合唱力に惹かれて彼らをプロに誘ったのです。

山崎: そうだったんですか。

村井: この赤い鳥のために書いたものが『翼をください』でした。つまり、5人のコーラスで歌うことを想定していたわけです。ですから、後にこの曲が合唱曲として残ったというのには、そこにポイントがあったのかな、と今になって思います。

山崎: なるほど、それで二部に分かれても違和感がないのですね。

作曲者の手から世の中へ

山崎:作曲された経緯をぜひ教えてください。

村井: 僕ははっきりと覚えていませんが、作詞者の山上路夫さんによれば、最初に彼が『希望』という題の詩をつくってくれて僕がそれに曲をつけて返したら、「これだと詩が音に負けている」といって詩を書き直し、今の形になったようです。

山崎:最初から『翼をください』というタイトルで書かれたわけではないのですね。中学校に入学してきて初めて会う子どもたちに「どんな曲を歌える?」と聞くと、何曲か出てきますが、きちんと最後まで歌えるものは『翼をください』ですね。小中高すべての教科書に継続して載っている歌は、ほ







んとうにわずかだと思います。今でもこんなに歌い継がれて いることについては、いかがですか?サッカーの応援ソング にもなりましたね。

村井:1998年のワールドカップ・フランス大会の予選で、大 苦戦していた日本代表チームの本戦出場をかけた最後の試合 会場がマレーシアでした。日本から応援団が2万人も3万人 も行ったようですが、そこで『翼をください』が歌われたの です。ですからそのあと、僕もパリまで応援に行きました。 日本のサッカーブームの一つの転機にもなったし、そんなと きに『翼をください』が歌われたことはとてもうれしいこと です。テレビ番組で映像を見たときは「すごいことになって るなぁ!」と、感動しました。

レコード屋さんから作曲家に…?

山崎:ところで、村井先生は小さい頃から作曲家を目指して いらっしゃったのですか?

村井: 僕はね、大学での専攻は政治学なんですよ。

山崎: えっ! 音楽大学出身ではないのですか!?

村井:大学時代にジャズ・オーケストラでピアノを弾いたり アレンジをしたりしましたが、クラシックについては系統的 に勉強したことがありません。

山崎:意外でした。すごいですね~!

村井: それで、大学4年生のときに、レコード屋さんを開い てね…。

山崎:…レコード屋さん?

村井: そう、レコード屋さん(笑)。というのは、4年生になる と同級生は就職が決まっていきますよね。景気もよかったし。 でも僕はバンドばかりしていて就職活動をしていなかったの で、どうしようかなぁと思い先輩に相談したところ、「レコー ド屋さんをやればいいじゃないか。一日中好きなレコードを 聴いていられるぞ」って(笑)。それでレコード屋を始めた。



『ひこうき雲』: 荒井由実 ©EMIミュージック・ジャパン



山崎: ずいぶん思い切った展開ですね。

村井: その頃、ブルー・コメッツの『ブルー・シャトウ』とい う曲が大流行していました。どうしてこんなにヒットしてい るんだろうと、自宅にレコードを持って帰ってちょっと分析 をしてみたら、こういうものなら自分でも書けるぞ!と思っ て書き出したんです。

山崎: それで作曲を始められたのですか! クラシックのピア ノのお稽古をされた経験は…?

村井: それもしていないんですよ。家にピアノがあったので、 触って音を出したことはありましたが、きちんと習ったこと はありません。でも、中学から高校にかけてアルト・サクソ フォーンを吹きだして…チャーリー・パーカーのように吹き たくてね(笑)。それで、ジャズの先生のところに習いに行っ たのです。そのときに譜面の読み方や書き方を教わりました。

才能を見いだすプロデューサーという仕事

山崎:村井先生は作曲家として活動すると同時に、ユーミン (松任谷由実)やイエロー・マジック・オーケストラ(YMO) をはじめとする、多くのアーティストを世に出されたプロ デューサーとしても活躍されています。ユーミンとの出会い はどのようなものだったのですか?

村井: 元タイガースの加橋かつみさんのソロ・アルバムをレ コーディングしているとき、誰が書いたのか分からないけれ どすごくいいなと思った曲があったので、「これは誰の曲?」 と尋ねたことが始まりです。すぐ関係者に「この曲をつくっ た人はすごく才能があるから、ぜひうちの会社で契約した い」と頼みました。でも彼女は当時まだ高校生で、そのうえ 受験生だったものですから、大学に入学してから契約しまし た。その後1年経って、彼女の書いた曲が10曲20曲とたまっ てきたので、プロのシンガーに歌ってもらったのですが、ど うもイメージが違う。僕もうちのスタッフもみんな、デモで



『ソリッド・ステイト・サヴァイヴァー』: YMO ©ソニー・ミュージックダイレクト



Oおらい・くにひて

1945年生まれ、東京都出身。作曲家、音楽プロデューサー。慶應義塾大学在学中は名門 バンド・サークル「ライト・ミュージック・ソサエティ」に所属した。

60年代後半のグループ・サウンズ全盛期に作曲家としてデビューし、69年に音楽出版社 「アルファ・ミュージック」、77年に「アルファ・レコード」を設立した。

音楽プロデューサーとして松任谷由実をデビューさせたほか、80年代には、元ティン・パ ン・アレー(松仟谷正降らによる音楽ユニット)の細野晴臣を中心とした「イエロー・マジッ ク・オーケストラ(YMO)」を世界へ送り出した。

92年、事業の海外准出を機に活動の拠点をアメリカへ移す。

現在はアメリカと日本を行き来し、ヴィラスミュージック代表取締役会長として、また 作曲家として活躍している。

聴いた彼女本人の歌声がとても気に入っていたんです。それ で「そうだ、彼女の歌でレコードをつくろう」ということに なりました。

山崎: なるほど。 ユーミンがつくった曲に何か、はっとする ものを感じたのですね?

村井: そうです。 使っている和声が、 僕らがジャズなどで使っ ているものと同じだったんですね。それは当時とても珍しい ことでした。

山崎: それから、坂本龍一さんのファンとして、ぜひYMOの ことも伺わせてください。

村井: まず細野晴臣くんと仲よくなったことがきっかけです。 もしかすると『翼をください』の最初のヴァージョンでは細 野くんがベースを弾いているかもしれないな。そのあとも ユーミンの曲で演奏をしてもらうなど、ずっと音楽家どうし の付き合いを続けていました。1970年代後半に、彼が当時新 しかったエレクトロニクス・ミュージックを始めたいと言い だし、高橋幸宏くんと坂本龍一くんを連れてきて、「YMOを つくろう」となったわけです。

新しいものを追求する理由

山崎: 先生の周りは才能ある人の宝庫だったように思います。 どうすれば人のよい面を引き出したり、互いに高め合ったり することができるのでしょうか?

村井: 類は友を呼ぶというか、お互いに尊敬の気持ちがない

と集まりもしないし、いっしょに仕事もできませんよね。認 め合えることがすごく大事じゃないかなと思います。

山崎: 当時、ユーミンやYMOなどは、それまでになかったサ ウンドで、画期的なアーティストだと感じました。新しいも のを拒絶したり恐れたりせず、「いい!」と受け止められる気 持ちは、どのような意識から生まれてくるのでしょうか? 村井:探究心からかもしれませんね。なぜ新しいものを追求 するのかと言うと、古いものをよく知っていて、過去から多 くを学んでいるからです。例えば、細野くんのポップスや ロックに関する知識、演奏能力にはものすごいものがありま す。彼の場合はそういう知識や技術を、当時最先端の楽器で あったシンセサイザーと融合させてみようということでし たし、ユーミンにしても古いジャズをはじめ、さまざまな音 楽を聴いていたようですよ。かまやつひろしさんに言わせる と、「ユーミンは相当なオタクだぞ」と。いろいろな音楽を聴

山崎: 昔からのものを理解したうえで自分なりのものを築く ということが、「新しさ」につながるわけですね。

いて研究しているのですね。

村井: 先日、とあるコンサートに行ったのですが、一つ感じ たのは、ユーミンの時代から音楽がほとんど変わってないと いうことでした。もちろん、言葉が詰まっているとか、構成 がややこしくなっているという今の時代の特徴はあります が、骨組みとしての和声は70年代と同じです。彼らはもっと 古いものを聴いていないのかなぁと思いました。ジャズの世 界とか、ロックの世界とか、クラシックの世界とか、もっと 勉強すればいいのになぁって。

山崎: 私は子どものとき、ベニー・グッドマンを父によく聴



○やまざき・ともこ

東京都出身。国立音楽大学卒業。作曲を石井亨、中島良史の各氏に師事 町田市立鶴川第二中学校に勤務している頃から合唱曲を発表し始める。 卒業式などの式歌や合唱曲を中心に作曲活動を展開し、薬物防止キャン ペーンのテーマ曲なども手がけた。

現在、調布市立調布第七中学校に勤務。

作品集『山崎朋子 Original Songs』(同声編、混声編)が発売されている。 主な作品:合唱曲『明日の空へ』『友達でいようね』『手のひらをかざし て』『大切なもの』『あなたに会えて…』『絆』『春風の中で』など。



「つくった曲をぜひ聴かせてください!」とのリクエストを受けて、 弾き語りをされた山崎先生。

かされていました。

村井: そうですか。僕もベニー・グッドマンが好きで最初に クラリネットを習いましたよ!

自分がいいと思うものを求める

山崎: 作曲家と音楽プロデューサーという対極にあるものを 両立する秘訣はなんでしょうか?

村井: どちらの仕事にしても、好きなことをとにかく一生懸命行うことですね。作曲家としては自分が「これがいちばんいい音だ」と思うもの、真実を書かなければいけないと思っています。プロデューサーとしては、対象であるアーティストにまず自分が惚れ込まなければいけません。また、そのアーティストにマーケットがあるかどうかということも重要になります。今、日本で売れているのは、J-POPやK-POPをはじめ、4つぐらいのジャンルのものです。ここを相手にしていれば確実に売れますよ。でもそこだけを狙うのではだめだと思います。ユーミンを売り出すときも「これはロックですか?フォークですか?」と聞かれました。どの層にアピールするのかということですが、そのとき私は「ユーミンというマーケットをつくりましょう」と答えました。

山崎: 当時は大御所がアーティストを見いだすのではなく、 10歳も年齢の違わない人たちが新しい音楽を動かせた時代 だったのですね。

村井: そうです。日本全体が高度成長の中にあり、朝目覚めると毎日違うことが起こるといった、アクティヴな時代でした。

山崎: CDが売れないと言われる最近の状況をどう思われますか?

村井: まずインターネットとデジタル・テクノロジー、この 2つの出現によって、社会の在り方が完全に変わってしまっ たことが大きく影響していると思います。これは古い時代で言えば、グーテンベルクの印刷技術の発明と同じぐらい強烈なインパクトのあることです。次に音楽や本の分野の話をすると、この2つによって、まったく音質が悪くならずにいくらでも複製ができるようになったし、インターネットで遠いところへ送れるようにもなりました。その結果日本のレコード産業で言えば、売り上げが 4 分の 1 に減ってしまいました。それでもまだ日本はCDの売り上げが半分ぐらいありますが、これはまれなことです。欧米ではもうデジタルの販売のほうがCDよりも増えている状態です。

山崎: そうですね。

村井:だけど僕たちの時代には、「このレコードがもうかるかもうからないか」とか「損益分岐点を超えるかどうか」ということはさほど問題にしていませんでした。自分がいいと思うものをどうやってつくるか、ということを考えていました。それでユーミンみたいにすごく売れれば、結果として膨大な利益を生み、その利益を次のいい音楽に使っていたというのが僕たちの経験したレコード産業黄金期です。だから、例えば黛敏郎さんと邦楽の箏による前衛的なレコードなど、今では企画を出しても通らないようなレコードをたくさん出しました。

山崎: 今後の活動についてもお聞かせください。

村井: 僕は今、作曲の仕事に専念しています。そちらのほうが自分のやりたいことだからです。最近、クラシックの演奏家、チェロの岩崎 洸さんやヴァイオリンの川久保賜紀さん、ソプラノの森 麻季さんらと録音の仕事をする機会がありました。音楽性、テクニックともにすばらしいものをおもちの方々で、とても楽しかったです。近い将来、森麻季さんとのアルバムも発表する予定です。子どもたちに歌われる曲をつくろうと動いているんですよ。大正デモクラシー時代に書かれた作品…北原白秋とか、そういうものの現代版ですね。その中の『つばめが来る頃』という曲は、女声合唱にアレンジされた楽譜を出版しようと思っています。

山崎:いいですね。ぜひ先生の曲を歌いたいと思います。先生を創作に駆り立てるものはなんでしょう?好きだからですか?村井:そうですね。あとは好奇心です。こうしたらどうなるのだろうと。それと過去からの刺激です。どうしてこう書いたのだろう?という。

鑑賞授業の記憶

山崎: 学校での音楽教育で大事にしてほしいことはありますか?

村井:自分の小中学校時代の教育しか知りませんが…。僕が印象的だったのは、もうだいぶ前のことですけれど(笑)、名

曲をレコードで聴かせてくれたことです。名曲アルバムだったかなぁ。曲を聴き終わったら、必ず 1 人ずつ先生に感想を言わなければならなかった。

山崎: 今と似ていますね! 最近は、鑑賞曲を聴いて感じ取ったことを言葉で表せるようにしましょう、という傾向なんですよ。

村井: そうですか。中学生になったら、みんないたずら坊主ばかりだし、音楽の授業は進学に関係ないからみんなうわのそらで、音楽を真剣に聴こうとしているのは音楽に興味がある人だけでした。これには子ども心ながら「音楽の先生は大変だな」と思っていました。今でも聴かせますか?

山崎: 聴かせますし、感想を書いたり言わせたりもします。 最近は特にコミュニケーション能力の育成が重視されるの で、思ったことを言おうという時間を取っています。

村井: 僕たちの頃は、1人ずつ先生のそばまで行って、他の子に聞こえないように小声で耳打ちし「僕はこういうふうに思いました」「そうかそうか、次!」という感じでした。

山崎: なるほど。教師としては音楽好きな子どもを育てたいと思っているのですが…。

村井: うーん、僕もそうだったけど、音楽って分かる人には分かるし、分からない人には分からないんですよね。だから分かる人が増えれば、あるいは好きになるきっかけがあればいいなと思います。僕もあなたも、きっかけはベニー・グッドマンだけど(笑)、なにかの曲だったり、なにかの演奏会だったりね。

子どもはほめて育ててほしい

山崎:子どもたちへメッセージをお願いします。

村井:自分の好きなことを見つけなさい。好きなことを一生 懸命がんばりなさい。

山崎: 私たち教師にもいただけますか。

村井:いろいろな育て方があるけれど、僕は九割九分ほめたほうがいいと思います。叱るのは千分の1ぐらいでいいんです。そのほうが怒ったときに怖くて効き目がありますよ。僕のおじいさんはものすごく優しい人だったけれど、1回だけ、どなられたことがありました。風邪で寝ていなさいと言われて部屋にいたけれど、どうしても外に出たくなって庭で遊んでいたら、ふだん優しいおじいさんが「ばか者っ!」と。そのときは震え上がりましたよ。そういうのは千回に1回にして、その他はとにかくほめて育ててほしいと思っています。



Information

◇ 村井邦彦さんの2013年の活動

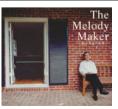
劇団スタジオライフによって公演される『カ リオストロ伯爵夫人』で音楽を担当(演出:倉 田淳、美術:宇野亜喜良)する(7月)他、歌曲 アルバムを制作中。

♦ CD

『The Melody Maker―村井邦彦の世界―』

・ 村井邦彦さんの作品集となる5枚組のアルバム。数々の 作品の他、未発表作品も収録。

MHCL-1987 ~ MHCL-1091/定価12,600円(税込)



©ソニー・ミュージックダイレクト

授業者に訊く一つ

江戸時代からの文化の名残をもつ街、日本橋人形町を訪ねました。

ゲストティーチャーの指導による鼓の体験学習を中心 に、伝統音楽の学習に取り組む日本橋小学校5年生の 授業を紹介します。

初めて触れる鼓を手に、子どもたちは積極的に活動していました。

授業者: 紺野一恵 (中央区立日本橋小学校) ゲストティーチャー: 望月美恵



本時の授業の位置付け

本時はゲストティーチャーに鼓指導者の望月美恵先生を迎え、「鼓の音」「鼓の打ち方」に焦点を当てた授業を展開します。映像資料による鑑賞とともに、実際に間近で鼓の音を聴き、自分で鼓を打つことを通して、子どもたちが日本の伝統芸能に興味・関心をもつようにすることを目指します。鼓の体験学習の授業は1時間扱いですが、本校では和楽器の学習として、4年生でお等、5年生で鼓、6年生で和太鼓の演奏を行います。



永井勝巳 先生 中央区立日本橋小学校校長

授業の流れ

	○学習の内容 ・学習活動	●教師のかかわり ☆評価
	○子目の内存 ・子目/1到	●教師のカカカラク☆計画
導入	○今月のうた 『テルーの唄』を歌う。	●ソロのパートを歌う子どもの確認
	・ソロのパートと全体で歌う部分を	をする。
	確認し、きれいな声で歌う。	
展開	○本時のめあてをつかむ。	●3年前から5年生が鼓の指導をし
	鼓の音ってどんな音?	ていただいている望月美恵先生を
	・鼓はどのように打つの?	紹介する。
	○鼓の音を聴く。	
	・望月朴清先生が演奏している『春の	
	海』のDVDを見る。	
	・『とんび』の音楽に合わせて鼓の音	●子どもたちが音を聴きながら『と
	を聴く。	んび』を歌えるよう、拡大楽譜を提
	○鼓を構えて音を出す。	示する。
	・構え方や音の出し方を学ぶ。	●音を出す子どもと様子を見る子ど
	○鼓とピアノのコラボレーションを	ものグループに分ける。
	・ 聴く。	
	・『雛鶴三番叟』の演奏を聴く。	
まとめ	·	☆鼓の音色に親しみをもち、また打
		ちたくなったか。意欲的に鼓の演
		奏に取り組んでいるか。

ゲストティーチャーとともに学ぶ 伝統音楽の技と心

聞き手:清水知子(練馬区立開進第二中学校)

初めての鼓体験

清水:子どもたちは熱心に鼓に取り組んでいましたね。紺野先生は本日指導された望月先生とのチームティーチングによって、子どもたちにどのようなことを学習してほしいとお考えになっていらっしゃいますか?

組野: 4年生で『さくらさくら』を扱いますが、歌唱だけでなく箏も弾けるようになってほしいという思いから、箏の指導を20年来続けてきました。本校には畳の部屋に10面ほどの箏があります。鼓の指導は、3年ほど前に望月先生が「子どもたちに、ぜひ鼓を教えたい」と、学校を訪ねてきてくださったのが始まりです。私自身、鼓子どもたちによいりませんでしたが、チンピーという気持ちを強くもっていましたので、ゲストティーチャーとして体験学習を

お願いすることにしました。

清水:では今日授業を受けた5年生は、 筝をすでに体験しているわけですね。 紺野:そうです。

清水: 鼓は今日が初めてということですが、子どもたちは一瞬にしてよく〈ポン〉と〈タ〉*が分かりましたね。 紺野: 子どもたちの耳のよさには私も

だまます。 驚きます。

*鼓の音を表す語。しらべ(麻縄)を締めたり緩めたりして音色に変化を与えます。

1人でも表現できるように

清水:授業の始めに『テルーの唄』を歌いましたが、ソロの部分を歌おうという意欲のある子どもが多くて驚きました。すばらしいですね。

紺野:子どもたちは1人で歌うことが 大好きなんです。私は「1人で表現でき る」ということがとても重要だと考えています。もちろん学校教育ですから、 みんなで合わせること、そのすばらし さを味わうことも大事です。でも私は、 みんなの前で1人で表現できるように、 1年生のときから指導を積み重ねています。

清水:自己表現ができるということですよね。「ソロの部分をやりたい人は?」と呼びかけると、10数人が手を上げました。

紺野:「ドキドキしたでしょ?」と聞けば「うん」と答えますが、16小節ぐらいの曲でも1人で堂々と歌えること、人前でそれを認めてもらう大切さを知ることも教育だと思います。

清水: 男の子は特におなかから声を出して、しっかり歌っていました。この「おなかから」というのが、日本音楽でも重要になりますね。

紺野:望月先生にゲストティーチャーとして指導していただくようになって、 私もそう感じるようになりました。

本物に触れる

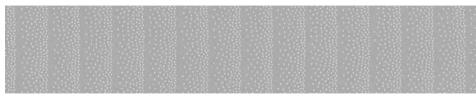
清水:私は中学校で教えていますが、15年ぐらい前から『勧進帳』を授業で取り上げていて、たまたま親戚に能のワキ方の者がおりましたので、その親戚や活躍中の奏者の方に授業に来ていただくようになりました。

紺野: それはすばらしいですね。伝統音楽に携わっていらっしゃる方は、言葉の重みやしぐさなど、にじみ出てくるものが違いますから。

清水:生徒はそれをしっかり感じ取っています。昨日はちょうど狂言師の方に、和泉流の舞を舞っていただいたのですが、初めは「紋付き袴なんか着て何



| 8





中央区立日本橋小学校主幹教諭

するんだ?」と見ていた3年生も、しだいに集中してきました。本物の声の出し方を聴き、背筋がだんだん伸びてきて…。最後には「かっこいい!」と言いながら帰っていきました。これがゲストティーチャーに来ていただくいちばんの意義だなと思います。

組野:小学校では、子どもたちが鼓を体験してその作法を知ることにより、日常の挨拶や生活態度にとてもよい影響を及ぼしているような気がします。もちろん、鼓への関心・意欲にも結び付い

ています。

清水:ところで、私の場合はゲストティーチャーが大鼓と小鼓を30用意してくださいますが、今日の授業ではどうされたのですか?

紺野: 望月先生が持ってきてください ました。ただ、学校でも少しずつ購入 しています。昨年は「鉄琴や木琴では なく、とにかく鼓が欲しいです」とお 願いして、2つ鼓を購入してもらいま した。今年も2つ増え、やっと4つそ ろいました。たくさんあれば子どもた ちも自由に鼓を学習に取り入れること ができます。また、すでに鼓を体験し ている6年生が下の学年の子を教える というかかわりも生まれてきました。 私はそこがとても大事だと思っていま す。「ちょっと教えてあげて」と頼むと、 **丁寧に教えてくれます。やはり後輩に** 教えることが誇りにもなるのかな、と 思います。そうやって学年をこえてつ ながることで、鼓もより身近なものに なってくるのではないでしょうか。下

地を作るのに2~3年かかると思いますが…

息と声が大事

清水:鼓の演奏をDVDで鑑賞したあと、望月先生が『とんび』に合わせて鼓を打ってくださいました。これにはどのようなねらいがあったのですか?

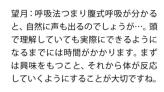
紺野:子どもたちが少しでも鼓に親近感をもてるよう、みんなが知っている『とんび』に合わせて望月先生に鼓を打ってもらってはどうかと考えました。伝統的な楽器が歌に加わるとどんな感じがするか、子どもたちに体験してもらいたいと思ったからです。

清水:さきほど先生がおっしゃった、子 どもたちが鼓を自由に学習に取り入れ ていくことにもつながるわけですね。 紺野:そうです。

清水:ここからは望月先生にもお話に加わっていただきながら進めたいと思います。私も中学生といっしょに鼓を打っていますが、「イヨー」とか「イヤー」という掛け声がなかなかおなかから出せません。声が響かないのです。望月:1つの音を生み出す前に間をとることを「コミ」といいます。ためて、ぐうっとためておいて息で打つ、といったイメージでしょうか。鼓の作法には武士道からきていると思われるものがあるんですよ。

清水: どうしてもただポンポン叩いて いるだけになってしまいますが、そこ が全然違うのですね。

紺野:子どもたちに鼓を持たせると、「ポン」とすぐに音を出してしまいますが、打ち方ではなくて、息と声がとても 大事であるということを望月先生に教えていただきました。



和の心を学ぶ

清水:私自身、和楽器の経験がまったくありませんでした。本当に申し訳ないのですが、授業で『勧進帳』を扱ってゲストティーチャーに来ていただくまでは、西洋音楽のほうがレベルは上だと考えていたのです。でも邦楽の方々と実際にお話をしたり、演奏を間近で拝見したりしていくうちに意識が変わりました。伝統音楽を伝承することの大変さ、使命感、彼らの生き方そのするとでき、との体が間違っていると思うようになりました。

望月:ベートーヴェンやモーツァルトの名前を知っている日本人は多いと思いますが、日本の歌舞伎には『勧進帳』や『娘道成寺』があるということを、知っている人は少ないのではないでしょうか。でも、こうしてゲストティーチャーとして子どもたちと触れ合って



○しみず・ともこ 練馬区立開進第二中学校教諭



いると、やはり子どもたちには日本人 の血が流れているなと感じます。学校 の授業でほんの少し経験するだけでも、 日本の伝統音楽に興味をもってくれる のですから。そういう学習が日本の文 化を大事にすることにつながると思い ます

清水:『勧進帳』の最終場面を生徒に見せて「今までに聴いた音楽と比較して気付いたことは?」と質問すると、「ヨオヨオ言っている」「指揮者がいない」「譜面がない」などという答えが返ってきました。「ではどのように合わせているのだろう?」と再び映像を見てみると、実際には合っていないこととに気付きます。でも日本の音楽は合っていなくてもいいんだ、ということをゲストティーチャーとの学習から確認することができるのです。

望月: 私としては日本の伝統音楽をもう少し一般化させるには、どうしたらよいのかという悩みもあります。

清水:日本の伝統音楽では楽譜を読むのではなく、まず体得する、例えば唱歌などをお師匠から1対1で教わるといった方法がとられていることが一般に広がらない一因だと思います。世界



共通の楽譜もないことですし。日本の 伝統音楽を五線譜に書き直して演奏す ると、やはり本来の音楽から離れてし まいますか?

望月:そうですね。今日は授業の最後にピアノとコラボレーションをしましたが、ピアニストには「私が掛け声を入れたらのってきてください」と伝えてあります。五線譜に書き直してくれたのもその方なのですが、五線譜のとおりに弾いてしまうと、本来のものとまた感じが違うのです。

清水: 西洋音楽だと一つに合わせなければならないけれど、日本音楽はそれだけではない、ということですね。

望月: もちろん、西洋も日本も、リズム



については共通点があると感じます。さ きほど演奏した『雛鶴三番叟』のあとに は『三番地』というリズムが出てきます が、そのリズムはブラジルの「サンバ」 と共通点があると考えられています。 紺野・清水:へぇ!

望月:日本音楽でもはっきりとビート にのるところと、のらないところがあ りますが、『三番地』を流しながらだと、 きれいに鼓を打てるんですよ。少し速 いのですが。日本も西洋も案外似てい る部分はあるものです。音が何もない ところを生かすという点などもそうで すね。

「和」の学習で広がる「輪」

清水:最後に紺野先生に伺いますが、子 どもたちは鼓を経験したあと、何か変 化がありましたか?

紺野: これから「鼓の会」というのを行 う予定なのですが、それに向けて「演奏 してみたい人はいますか?」と尋ねる

と、10人ぐらい希望者がいました。先生 のお宅へお稽古にも行かなければいけ ないけれど、やってみたいと言います。 子どもたちにとってはステップアップ

また、今年の校内音楽会は「和」を テーマにしたプログラムを考えていま す。教科書では文部省唱歌を「心の歌」 としており、比較的自由に学習するこ とができますので、季節に合わせて… 3年生では『春の小川』、『茶つみ』を 取り上げ、お茶の木や実際に茶摘みで 摘んだ葉っぱなどを子どもに見せたり 匂いを嗅がせたりしながら、私の実体 験を織り交ぜて授業をしています。鼓 からは話がそれてしまいましたが、そ うして私は日本音楽の大切さを伝える ように心がけています。今年の校内音 楽会で、3年生は『春の小川』と『茶つ み』、それから『富士山』、4年生は箏で 『さくら さくら』、5年生は鼓、6年生 は和太鼓を演奏します。子どもたちは 和太鼓も大好きです。

本校では毎年邦楽鑑賞教室が行われ、 日本の音楽の演奏、長唱を鑑賞してい ます。6年生になると和楽器の体験学 習もします。この人形町という場所は 地域性も影響しているようで、都会の 中にありながら日本のことを伝えるに はとても恵まれている場所だと思いま す。お祭り…夏祭りがたくさんありま す。「大江戸まつり」等、有名な「べった ら市」というものもあります。地域の方 から、子どもたちに「べったら市の歌」 をつくってほしいという依頼があって、 子どもがつくりました。

清水:「和」だけでなく「輪」にもなりま

紺野:はい。太鼓が軽く入った曲なので すが、べったら市で町中に流され、中に は「すごく景気がいいですよ」と言って くださるお店の方もいらっしゃいます。 このように、この地域ならではのもの をできるだけ活用したいと思っていま す。とても魅力的な地域です。

清水: そのような環境で鼓の学習がで きるということはすばらしいですね。 子どもたちには、ぜひ積極的に鼓に触 れてほしいと思いました。

紺野: 私は鼓を「たたく」とは言わず 「打つ」というところがとても気に入っ ています。心を打つ、命を打ち込むな ど、すばらしい表現と結び付いていく からです。また鼓の音色は「十人十色 でいい」ということも大事にしたいと 思っています。



究主題として実践的な研究を積み重ねてきました。 「授業者に訊く」では今回初めて研究授業での実践を取 り上げ、5年生による『カレリア』の比較聴取をポイン トにした鑑賞授業をご紹介します。

授業者: 澤野和泉 (横浜市立桜岡小学校)

授業者に



本時の授業の位置付け

「曲の特徴を感じ取って聴こう」とい う主題による、5年生の鑑賞の授業は 2回目です。前回の『ます』の鑑賞で は体で表したり、主な旋律を口ずさん だりしながら、音色や旋律、リズムな どの音楽を形づくっている要素の関わ り合いによってつくられる、曲想の変 化を聴き取ったり感じ取ったりしまし た。今回の学習では比較鑑賞や紹介文 を書く活動を取り入れることで、より いっそう、楽曲の特徴や演奏のよさに 対する理解を深めます。

本時は3時間扱いのうちの第3時に 当たります。第1時では「曲想とその 変化を感じ取って聴く」、第2時では「楽 曲の構造を理解して聴く」、そして本時 は「楽曲の特徴や演奏のよさを理解し て聴く」ことが目標です。

授業の流れ

	○学習の内容 ・学習活動	●教師の関わり ☆評価	
導入	○『フィンランディア 』を歌う 。	●楽譜を提示しておく。	
展開	○音源①(組曲『カレリア』から「行進曲 風に」)と音源②(同上)の楽曲の特 徴や演奏のよさについて話し合う。	☆楽曲の特徴や演奏のよさに気付い て聴いているか。	
	・音源①を聴く。(ネーメ・ヤルヴィ 指揮)	●同じくらいの速さの音源を選び、 音色の変化に注目できるように する。	
	・音源②を聴く。(バルビローリ指揮)	●音源①をもとにして音源②を聴き、 比較することができるようにする。	
	・体を動かしながら聴く。	☆行動観察	
	気付いたことをメモする。	●メモをもとに話し合えるようにする。	
	○おすすめカードを書き、発表し合う。	●同学年の友だちあてに書くよう説 明する。	
	・音色、旋律、反復、変化などの要素	●前時の学習カードをふりかえらせ、	
	を使って文章を書く。	伝えたい内容を選ぶようにする。 ☆学習カード	
	○音源①か音源②のどちらかを選ん		
	でもう一度聴き、楽曲の特徴や演		
	奏のよさを味わう。		
まとめ	○ふりかえりカードに記入する。	☆ふりかえりカード	
		●ふりかえりカードは、項目ごとの	
		ふりかえりと、簡単な文章を書け	
		るようなものを用意する。	
	・楽曲の音楽的特徴をとらえて、演	●楽曲の特徴や演奏のよさが表れて	

いるカードを取り上げ、よいとこ

ろを提示する。

奉のよさなどについて自分なりの

考えを書く。



坂田映子 先生 横浜市立桜岡小学校校長

| 12 13 |

楽曲の特徴や演奏のよさの理解を より深める

聞き手:長谷川真滑(東京都板橋区立北前野小学校)/ 取材協力: ト石千鶴(横浜市立桜岡小学校)



学級担任による音楽科への 取り組み

長谷川: 研究指定校として、何名の先生 で研究を進められているのですか? 澤野:研究主任である音楽科専科1名 と、私と上石先生を含めた4名の学級 担任、計5名です。

長谷川:他の教科の授業に加え、多くの 先生方の前で研究授業をする…と思う と、私などは大きなプレッシャーを感じ てしまうのですが、いかがでしたか? 澤野: 私はもともと音楽が専門ではな いので、一昨年から、周りの先生方に 助けられながら続けてきました。参観 にいらっしゃった先生方のほうが音楽 に詳しいのだろうな…と思うとプレッ シャーいっぱいでした。

長谷川: 担任をされている澤野先生と 子どもたちとの温かい関係が伝わって くる、そんな雰囲気に包まれた授業で したね。導入では、本題材で扱う鑑賞曲 の作曲者シベリウスによる『フィンラ ンディア』を合唱しましたが、とても澄 んだ歌声で、コラールらしい美しさが 感じられました。

澤野:音楽集会で歌っていましたし、本 題材でも1時間目から歌っています。 長谷川:原曲の交響詩『フィンランディ ア』は、授業でも鑑賞したのですか? 澤野:授業では聴かせていませんが、授 業の合間の時間にCDをかけて子どもに 聴かせました。

横浜市独自の指導計画

長谷川: ここからは澤野先生と一緒に 研究をされてきた上石先生にも加わっ ていただき、お話を伺います。まず本題 に入る前に、横浜市の指導計画作成に 関する特徴について少し教えていただ けますか?

澤野:横浜版学習指導要領では、ベース カリキュラムという形で年間の単元配 列が示されていますが、その中では鑑 賞は1曲に1時間扱いになっているこ

とが多いです。それを今回の研究では、 1曲に3時間かけて学習するというこ とにチャレンジしました。

上石:横浜市では鑑賞の主題を「曲の特 徴を感じ取って聴こう」としており、こ れを1年の間に異なる教材で何度か行 うことで「曲想とその変化などの特徴 を感じ取って聴くこと」も「楽曲の構造 を理解して聴くこと」も「楽曲の特徴や 演奏のよさを理解すること」も指導し ていくことになっています。

澤野:『カレリア』の前にはシューベル トの『ます』を取り上げて1時間扱いの 授業を実践しました。1曲の中で「音楽 を形づくっている要素のかかわり合い ~」と「曲想とその変化~」の2つの観 点に重点をおきましたが、今回の『カレ リア』は3時間扱いですので、すべての 事項をていねいに指導できるよう、1 時間目は「曲想とその変化~」、2時間 目は「楽曲の構造を理解して~」、3時 間目は「楽曲の特徴や演奏のよさ~」の ように分けて授業をしました。

長谷川:「曲の特徴を感じ取って聴こう」 という主題に対し、1時間であっても 学習指導要領の指導事項が3つも入っ ているのですか?

上石: 1時間でも指導案としては入っ ています。ただその中で、「この日はこ の事項をポイントにして扱う」という 指導をされる先生方が多いと思います。

比較聴取のポイント

長谷川: 今回の研究授業では、シベリウ ス作曲の組曲『カレリア』から「行進曲 風に」で、2種類の演奏の比較聴取に よって、「楽曲の特徴や演奏のよさを理 解して聴く」という目標が設定されて 澤野:2時間目までで楽曲の特徴、構造 をとらえ、3時間目で比較聴取を行い ました。

長谷川: 今回の授業で、大事にしよう と思われたポイントはどんなところで しょうか?

澤野:楽曲のよさをもう一歩踏み込ん で聴き取るために「もう一つの演奏を 聴いた」というところです。

長谷川:同じ曲の比較聴取は、演奏表現 のよさ、音色、響きの違いを聴き取るこ とがねらいになると思います。今回は ネーメ・ヤルヴィ指揮の演奏(1つ目) とバルビローリ指揮の演奏(2つ目)を 1回ずつ聴かせました。2つ目の演奏 を聴かせる前に、澤野先生は「今日はも う1曲聴いてみようね! とおっしゃい ましたね。「違う演奏を聴きましょう」 ではなかったのですか?

澤野:「同じ曲である」、ということにま ず気づいて確認してほしかったんです。 長谷川: 2つ目の演奏を聴いたとき、 「おやっ?!」という顔をした子どもがい たら、すかさず「どうしてそんな顔をし たの?」と問いかけていらっしゃいま した。

澤野:1つ目の演奏をずっと聴いてい たので、2つ目の演奏を聴いたときに、 「あっ、違う。 どうしてだろう?」と気 づいてほしいと思っていました。

長谷川: 子どもたちは違いを聴き取る ことができるのかな?と少し心配でし たが、きちんと「1つ目の演奏は滑らか で、2つ目の演奏はタンタンタンと切 れている感じ」「1つ目の演奏は音色が 押さえぎみ」「2つ目の演奏のほうが盛 り上がっていた」などと、比較聴取がで きていましたね。

澤野:子どもたちは「ア(第1主題)」の 部分が好きだったので、「ア」に関する

話が多かったですね。

長谷川: 音源も、「ア」の部分の違いが わかりやすいものでした。ところで、今 回聴かせた演奏はどのようにして選ば わたのですか?

澤野: 音源は「音楽鑑賞振興財団(おん かん)」にあったものをすべて聴き比べ て決めました。

長谷川: 選択する際のポイントは? 澤野:まず「演奏の速さが違っているも の」と「編成の違うもの」は除外しまし た。子どもたちが速さの違いに気を取 られてしまわないように配慮したかっ たからです。あとは教科書準拠の演奏 よりもはっきりと「ア」と「イ(第2主 題)」の印象が違うものを選びました。 長谷川:具体的にはどのような点ですか? 澤野:「イ」の部分がより華やかなもの を選びました。

長谷川: のべ何曲ぐらい聴かれたので しょうか?

澤野: リストにあったものをすべて聴 いたので…20曲ぐらいだと思います。



聴くこと、書くことへの意欲

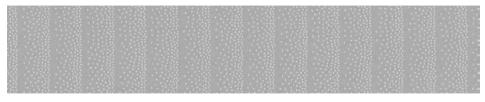
長谷川:子どもたちの反応を見て、3時 間扱いで指導された感想はいかがでし たか?

澤野:やはり何回も聴き、またポイント をしぼって聴いただけのことはあり、 最後に書いた曲の紹介文が前回の『ま す』より深いものになりました。いろい ろな特徴を聴き取ったり、感じ取った りしたことを書けていました。

長谷川:『ます』の紹介文には、要素的 な関わり合いや、音色が変化すること などについては書かれていませんでし たか…?



| 14 15 |





澤野: そうですね。変奏曲ですので、同じ主題が変化していくのがおもしろいということが書かれていましたが。

長谷川:『カレリア』は1つ目の演奏を2時間かけて聴き込んでいるので、子どもたちもよくわかっていたのですね。もちろん『ます』の経験もあってのことと思いますが。

深野:最初、子どもたちに「鑑賞ってどう思う?」とたずねると、「つまんない。なにを聴いていいのか、なにを言葉が返ってきました。感受したことについてや知覚した要素についての発言しか出てこない子どももいました。ところが今回の研究授業を行ったことで、「私はこの部分がパーティーをしているようだと思いました。なぜかというと…」などと、理由を用いて自分の感想を伝えることが、以前よりもできるようになりました。文章の得意な子どもはも

ちろん上手に文章が書けますが、苦手な子どもも、全体としてのまとまりはないにしても、部分的なことについては書けるようになってきています。「金管の部分では王様が出てくるような感じがしました」など、一人一人がなにか学習できていたようでよかったと思います。

長谷川:確かに、子どもたちはたくさん 書いていますね。

上石:事前研究のときも「鑑賞カードを書きましょう」というと、「もっともしと!」と子どもたちが書く時間をほしがりました。音楽の授業なのに、「書いている」時間が長いというのはどうなのかと…(笑)。それで研究授業に臨りをいる。「書く時間は減らして、聴くい・関策をいと取りましょう」と話し合い、授業展開を修正しました。でもそれだけ子どもたちの聴くことに対する気持ちが強いということなのだなと思いました。

長谷川:全体として充実した研究授業 になりましたね。

澤野:手ごたえのある授業でした。子どもたちの聴き方も変わったと思います。先日みなとみらいホールで5年生がオーケストラの生演奏を聴く機会があったのですが、前から楽しみにし、当日もとても集中して聴いていました。いつも「第1主題がこうなっていて~」という聴き方はしなくてできているからおもしろいんだ」「○○という曲とりになってきたようです。子どもの意識の高まりを感じ、こういう指導をしてよかったなと思いました。

長谷川: それはすばらしいことですね。 澤野: 授業後にCDが教室に置きっぱな しになっていると「かけてかけて」って いう子もいますし、かけると腕を動か しながらリズムを感じて、口ずさんでいる子もいるんですよ。



○さわの・いずみ 横浜市立桜岡小学校教諭

学級担任と音楽科専科の 連携

長谷川: さきほどもお伝えしましたが、子どもたちと担任の先生ならでは、といった温かい雰囲気が印象的でした。上石: 学級担任ならでは、というところでは…。私は専科の経験はありませんが、学級担任だからこそできる声がけや、見取りはあると思います。1週間に1度の専科の授業では築けない関係ですよね。ですから、学級担任の授業は見ていて安心感があります。担任のよさというものを出していきたいですね。

長谷川:ところで、ふだんは5年生だと 専科の先生が授業をされているそうで すが、何年生から専科指導となってい ますか?

上石:4年生です。

長谷川: 専科の先生と担任の先生でうまく連携を取りたいところですよね。 上石: リコーダーや鍵盤ハーモニカの 導入ではたいへん必要性を感じています。導入だけは専科の先生にお願いして、その後の指導は学級担任が、とい うふうに…。そういう連携があれば担任の先生の指導に対する不安も解消できるのかなぁと思うのですが。

長谷川: 専科の先生の専門性を生かしたいですよね。それとふだんから子どもたちを見ている担任の先生との連携。でも話し合う時間もなかなか取れませんし、鑑賞は一番難しいかもしれませんね。

澤野:音楽づくりも研究しないと、なにをしたらよいのかわからなくなってしまいます。

長谷川:基本の積み上げも必要ですし。 その1時間で急に指導しようとしても できないですよね。

澤野:歌もそうです。元気よく大きな声で歌えばいいと思っている子どもたちもいますので、指導が大事だと感じます。

評価への課題

長谷川:学級担任の先生として、音楽科の評価をするうえでの難しさやご苦労 はありますか?

澤野: 評価しやすいよう、ふりかえり カードを渡しています。子ども自身が、 今日のめあてについてできたかどうか を◎や○で表します。曲想の変化はどん な要素でわかりましたか?などと書い



○かみいし・ちづ 横浜市立桜岡小学校教諭



○はせがわ・ますみ 板橋区立北前野小学校教諭

てありますので、それに対して、音色、 強弱、などと書いているかどうか…それ から授業中の動きからくんでいきます。 長谷川:なにを聴いたらいいのかを、腕 の振りといった体の動きなどを通して きちんと理解していけば、書きたいと いうことにもつながっていくのでしょ うね。

上石:鑑賞以外でもふりかえりカードを使って見取っていこう、というふうになっていますので、私も評価規準にのっとって子どもたちにふりかえりをさせるカードを作っています。それを見ることによって、子どもたちが自分の演奏になにかを生かしてくれるといいな、と思いながら…。でも、何ができればAなのかという評価規準については、私たちの中でもねらいをはっきりさせないと、ぶれてしまうこともあると思います。

長谷川: そうですね。

上石:低学年の場合、評価としてAになる子どもの判断が難しいのです。すごく楽しそうにしているからAでありませんし。楽しそうにしているすべての子どもは関心意欲が高いということではないのです。低学年のうちはほとんどの子どもが音楽を好きなので、そこから先は教師が育てていかなければならない、という責任を感じています。



研究大会に向けて

特 集

神戸からの 研究協議会レポート

毎年秋に行われる研究大会。本誌 [Information] でもお伝えしているとおり、2013年も全国各地でブロック大会が予定されています。

中でも全日本音楽教育研究会全国大会は、毎年たくさんの参加者が集まる研究大会でありますが、本年の兵庫大会は例年の時期と異なり、6月20日(木)・21日(金)に神戸市にて開催されます。

今回のヴァンでは、大会に向けて行われた研究授業や研究協議を参観させていただきました。小学校1年生の音楽づくりと、中学校2年生による歌唱『夏の思い出』に取り組まれる先生方の研究活動を、佐野靖先生によるレポートでお届けいたします。

小学校・音楽づくり部会

小学校の「音楽づくり部会」は、平成 24年9月4日15時30分から神戸市立有野 小学校において研究協議を行った。研 究大会本番の授業者である竹下篤子教 諭の実践提案について、部会参加者に よって授業づくりに向けての掘り下げ た議論が展開された。

なお、この日の実践提案は、6月20日に竹下教諭によって実践された研究授業、1年生による「ドレミでおはなしをしよう」(於:神戸市立鹿の子台小学校)から継続するものである。研究主題との関連で大切にしたい学びとしては、①思いや意図をもって、②人とのかかわり、③楽しく学ぶために、④付けたい力、があげられている。

音楽づくり部会での検討内容は、主に以下の3点に集約される。

●子どもが身に付ける力

最初の論点は、この授業を通してどのような力を子どもに身に付けるのか、そのためにどのような基本的なスタンスでのぞむのか、という点である。音楽づくりを通して、思考したり探求したりする力の育成、コミュニケーション能力の育成といったことが確認され、では、そうした力をはぐくむために、常時活動も含めてどのような活動が大切かということが議論の対象となった。

リズム模倣やリズムリレーなど常時 活動の積み上げの大切さが指摘された あと、松下美知教諭から、身体感覚と リズム感を結ぶ活動が提案された。松 下教諭のデモンストレーションにした がって、参加者全員が自らの身体を用 いて動きとリズムを体験し、そのよさ を実感したのである。机上の空論に済ませないところ、さらには、授業者だけでなく、研究部会全員で試行錯誤しよりよい方向を目指しているところは、高く評価できるものである。

指導計画の具体

竹下教諭の実践提案は、「音遊び」を中心に構成されている。具体的には、手拍子やボディーパーカッションでリズム模倣やリズム問答、音リレーを楽しみ、それをさらにミュージックベルを使って行おうとするものである。指導計画の第4時には、鑑賞を組み込み、ドローンや鍵盤楽器に気付かせる。そして、鑑賞で学んだことを表現活動に生かし、ミュージックベルを用いて自分たちのチャイムをつくるというのが全体の計画である。

議論は、ドローンを使うのか使わないのか、使うとすればどうするのか、 〔共通事項〕のうち、強弱や音色に焦点化するのか、拍の流れにこだわるのか、本題材ではあえて扱わないのか等々にまで及び、参加者が自分自身の指導体験を交えながら、活発な意見交換が続けられた。

●ミュージックベルの取り扱い

もっとも白熱した議論となったのが、ミュージックベルの使用についてである。音具にこだわり、音楽づくりの導入としてミュージックベルを使いたいという授業者に対し、一方では、常時活動でせっかく積み上げてきたリズム問答やリズムリレーなどを生かした展開が望ましいのでは、という意見も根強くある。6月に行った研究授業では、「4音(ミソラシ)を使った問いと答えなどの旋律遊びを通して、簡単な旋律づく



| 18

りの面白さを感じ取れるようにする」というねらいのもと、ミュージックベルを使って旋律の模倣やしりとりが行われたが、学習活動を今ひとつ焦点化できず、課題を残すことになったという。そうした反省を踏まえつつ、ミュージックベルの低学年での教育的な可能性を追究したいという授業者の思いが尊重され、ミュージックベルの具体的な取り扱いについては、11月の竹下教諭による鹿の子台小学校での提案授業の状況をみて、あらためて検討することとなった。

※11月13日に実施された「いろいろなおとにしたしもう」という題材の授業は、「いろいろな音色に興味をもち、様子に合う音を探して音具や楽器の鳴らし方を工夫して演奏する」がねらいである。教材は「きらきらぼし」。ミュージックベルで星の音をつくる授業状況をみた部会の教諭たちは、総意により、来年度の全国大会において、音楽づくりの導入としてミュージックベルを用いることを決定したのである。

神戸市では、このような実践研究がこれまでにも活発に行われてきている。常に目の前の子どもの姿を思い浮かべ、具体的な教材や楽器、展開の仕方やかかわりなどについて熱心に話し合い、よりよい授業実践につなげようと研究を蓄積しているのである。このような真摯な取り組みは、必ず大きな成果をもたらすであろう。来年6月の研究大会本番が今から楽しみである。



中学校 • 歌唱分野



中学校の歌唱分野は、神戸市立福田 中学校の伊東祐司教諭が第2学年を対 象に授業を実践し、その提案授業を受 けて研究協議が行われた。

歌唱分野では、「生徒自らが楽曲に対して、思いや意図をもって歌うこと」が 追究されてきている。「誰もができる授業」と「こんな風に歌いたいと思いをは ぐくむ授業」を柱に構想された本授業 もその一環である。題材は「歌詞や曲想 を味わって、表現を工夫しよう」、教材 は「夏の思い出」である。

内容の特色としては、歌詞や曲想から「pp」「三連符」「テヌート」「フェルマータ」の効果について考える点、しかも4名一組のグループで一人が一つの記号を考え、同じ記号同士でグループをこえて意見交換している点、作詞者・作曲者の思いにつながろうとしている点などがあげられる。

授業後の研究協議は、参加者一人一人が気付いた点などを述べていく形で進められた。話題及び論点は、「表現の工夫」と「技能の定着」、「言語活動の充実に向けて」が中心となった。

「表現の工夫」と「技能の定着」

4名一組のグループ活動は、各自が 一つずつの記号に集中してその効果な どを考えることができたために、効率 よく展開されたと思われる。そして、同 じ記号を担当している生徒同十が集ま り、意見を交換したことで、グループを こえてそれぞれの思いを共有すること ができた。ただし、それによって他のグ ループの意見に左右されたり、時間を 取られたりしたことも確かである。議 論の尽きないところである。

「表現の工夫」にかかわっては、作詞 者・作曲者の思いを生徒がくみ取り、表 現できるようにするというねらいにも かかわらず、ワークシートの内容が、作 者の思いや意図について書くところと、 自分たちの思いや意図を書くところが 混在していて、生徒たちにわかりにく かったのではないかという指摘がなさ れた。また、作者の思いや意図につな がるのであれば、ピアノ伴奏も楽譜に 忠実に弾くべきではないかとの意見が あった。さらに、思いや意図を音楽表現 につなげていくためには、ある一定の 技能も必要となる。発声などの基礎・基 本をもう少しじっくり育てていく必要 もあるのではないかと、今後の課題が 示された。

言語活動の充実に向けて

伊東教諭は、これまでにも「音楽の手引き」を作成、活用し、音楽学習における言語活動の充実を図ってきている。 ワークシートの内容や生徒たちの発表からも、その成果は十分に表れた授業と言える。さらに、興味をもった楽曲に



ついては調べ学習をさせたり、音楽集 会で教科書教材以外の曲についても想 像力を働かせて記号を読み取らせたり して、授業以外の学びの場を工夫して 設定していることが報告された。

●助言者による指摘や示唆

研究協議の締め括りとして、研究大 会本番の授業の助言者である田中龍三 氏(大阪教育大学教授)から、貴重な助 言やアドバイスをいただいた。

まず、何を学ぶのかを明確にすると



いう大前提についてで、そこから決し てブレてはならないことが強調された。 次に、子どもが自分の思いや意図を持 たなければ創意工夫はできないという 点である。ただ「やらされている」にな らないよう、田中氏自身が校歌の歌い 方などの例を紹介しながら、目指すべ き方向を再確認した。また、知覚感受し ながら工夫するには技術が大切になる し、技術はある程度教える必要がある。 ただし、なぜ今、この技術を学ぶのかを 明確にすることが重要である。それに よって子どもたちの学ぶ意欲が高まり、 技能が育つのである。さらに、耳を育て るためには、比較聴取が有効であると の提案がなされた。学習活動の流れと しては、「個」→「グループ」→「個」と いう全体の流れはよいが、もっと互い の意見がぶつかるような工夫が必要で はないか、との課題も示された。

言語活動の充実や〔共通事項〕にかか わっては、生徒の意見をカード等で可 視化すること、話し合いの要点を絞ら せること、記号のもつ本来の意味を理 解するとともにそれを音楽の流れの中 で実感させていくこと、など示唆に富 む指摘がなされた。

予定の時間を超えての研究会は、終始熱気にあふれるものであり、来年度 の全国大会に向けての意気込みがひし ひしと伝わる内容であった。

文責: 佐野 靖(東京藝術大学教授)

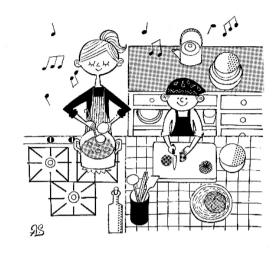




21 |

世界の食文化と音楽コウケンテツが贈る

―他の文化を受け入れて、新しいものを作る第1回(日本人の食と音楽)





音楽と服飾を関連させた連載「ミューズのワードローブ」に代わり、今号からは、世界の食文化を紹介しながら音楽のことも考える、といったテーマで連載を開始します。ナビゲーターは、料理のレシピをお好きな音楽のイメージと関連させて紹介するなど、音楽にも精通されている料理研究家のコウケンテツさん。数回にわたり連載する予定です。

(取材・構成:ヴァン編集部)

音楽もより好みしない

――コウケンテツさんは、音楽を幅広く聴いていらっしゃいますね。

コウ: 青春時代はワーグナーがすべてでした。もともと哲学者ニーチェの本を読むのが好きだったんです。ニーチェが若かりし頃ワーグナーに心酔していたことを知り、聴いてみると「これってワーグナーの曲だったんだ!」という感じで…。映画やCMなどですでに耳にしていたのですね。

高校生のときは、時代的にイギリスのパンク・ロックのムーヴメントにも出会いました。もともとシャーロック・ホームズやイギリスの文化、空気感といったものが大好きだったこともあり、イギリスの最先端をいくアーティストの音楽にどんどんのめり込んでいきました。彼らがR&Bを好きだと知れば、そこからR&Bを聴いてみるなど…。そんなふうに、音楽を吸収していったんですよ。本や映画に親しみながら普通に生活をしていく中で、不思議と音楽の世界が広がっていきました。

食と音楽のつながりを実感した経験

コウ:食と音楽の融合、そのすばらしさには、海外へ行って 初めて気付きました。

テレビ取材でトルコに行ったときの話ですが、意見の食い違いで、ディレクターの方とイスタンブールの居酒屋で大げんかをしてしまったんです。現地の「ラク」という度数の高いお酒を飲みながらどなり合いをして。そうしたら居合わせたお客さんたちが「まあまあまあ。いっしょに飲もうよ!」――言葉は分からないですけど(笑)。「おう、音楽鳴らせ!」とホルンみたいな楽器をお店の人に吹かせて、「乾杯!飲もう飲もう!踊ろう踊ろう!」って。ガーッと踊って…もうそれで一気に雪解けです(笑)。即、効きますよ。地の食べ物、地酒、地の音楽。これらがミックスされたすばらしさを、海外で初めて経験しました。音楽にはこんなよさがあったんだ、と。家でCDを聴いて感じる「いい曲だな~、いい旋律だな~」とは違う、体の中心に直接響いてくる体験でした。いっしょに踊って乾杯してつながる食と音楽の融合ってすごいこ

とですよね。

――ある種、人間の根源的な部分を呼び起こすような世界で すね。

コウ:食は、味自体を味わう楽しさもありますが、人をつないでくれると思うんです。それは音楽も同じですね。いろいろな国に行って感じたことですが、うまい料理、うまい酒、いい音楽。これらに出会えると、その国に裏切られることはまずないですね。一気にその場が楽しくなります。おいしい料理を分かち合う。言葉が通じなくても、「これ食べてみる?」「うまいね!」「乾杯!」「踊ろう!」。言葉はいらないです。そういう意味で食も音楽も簡単に国境を越えて行けるのです。

料理研究家として 世界の中の日本を見ると…

コウ: 僕のバックグラウンドは、日本生まれの在日韓国人であること。その視点もプラスして今の日本を見ると、日本には他の国の文化を受け入れ、吸収する豊かな土壌があると感じます。日本にいながら世界中の音楽を楽しめるのと同じように、世界中の食を楽しむことができる。しかもこんなにもハイレベルで楽しむことができるのは、ニューヨークやパリなど、ごく限られた場所だけだと思います。

食と音楽、海外から取り入れてそれを新しいものにしていく力

---カレーライス、ラーメン、とんかつ…私たちの周りには、 日本独自のものではないけれど、国民食と呼ばれるメニューがあります。音楽の世界も明治以降、洋楽が導入 されてから、それらを積極的に自国の文化に取り入れてきました。

コウ: 鎖国状態から開国したのちに他文化をどんどん受け入れる土壌がすごいなと思いました。例えば、ニューヨークやパリで食べる和食がハイレベルとはいっても、限られた外食文化上での話だと思います。しかし日本では、外食のレベルはもちろん、イタリアンやフレンチがある程度一般の生活の中に食文化として根付いているところがすごいんです。これはまねるのが得意とか、経済的に豊かであるという理由ではなく、他の国の文化を大切にしようという姿勢の表れという気がします。日本人は外国から入ってきたものを新しい形にして自国の人を納得させるエネルギーと技術をもっています。これは、本当にすごいてとですよね。

料理研究家として世界を旅する

コウ:料理研究家として、海外でホームステイをしながら向 こうの食文化、いわゆる「おふくろの味」と呼ばれるものを 学んで日本に紹介するという活動をさせていただいていま す。

「和食」といっても、僕らだって毎日お寿司やすき焼き、しゃぶしゃぶなどを食べているわけではありませんよね。だから家庭料理を食べるということは、その国の文化や歴史をてっとりばやく知ることができるチャンスなんです。しかも家庭で料理を作っている様子を見たり、家族といっしょに生活をして共に食卓を囲んだりするということは、その人たちの文化を理解できる要素がいっぱいあるんですよ。そういうことをしていたら、「食は国境を越える」ということをすごく感じます。いろんな国の要素が混じって音楽も発展してきたと思いますが、食もまさにそうだと思うんです。



世界の味覚事情

コウ:海外でホームステイをしていたときのことですが、食についておもしろいなと思ったことがあります。

向こうでは僕も和食を作るのですが、まず基本的に食べて もらえません。味覚は最も保守的な五感の一つだからです。 インドだろうがスリランカだろうが、トルコだろうがラオス だろうが、どこでもいいのですが、基本的にその国の人は自 分たちの町から出ないんですよ。だから、自分の村が一番、 自分の町が一番っていう認識がとても強くて、食べ物も慣れ 親しんだものしか食べません。未知の食べ物を「食べてみよ うかな」という発想がないんです。でも日本人は、「あ、この料 理おもしろそうだから食べてみよう」と、例えばチュニジア料 理を食べてみる気が起こる民族なんですね。そこがすごいんで すよ。初めて食べた味も、「ああ、海外にはこういうスパイスが あるんだな」と受け入れる舌を持っている。日本人の舌は前衛 的なんですよね。それはやはり、他の文化を受け入れて消化し て、新しいものを作るという土壌があるからだろうと思いま す。海外ではいきなり「みそ汁を食べてみてください」と言っ ても絶対に食べてもらえません。たとえ口では「おいしい」と 言ってくれても、一口で終わります(笑)。イタリアでも、「おれ たちの村の食べ物がいちばんおいしいのに、どうして他の国の 料理を食べなきゃいけないんだ」っていう感覚をもっています からね。

一日本人から見ると、毎日同じものを食べていて飽きないのかと心配になります。他の国では、自分たちの生活文化に即したものだけを食べるという感じなのでしょうか?

コウ:そうですね。料理自体にそれほどたくさんのバリエーションもないんですよ。だから日本のお母さんは大変だと思います。毎日おかずを変えないといけないから。

——韓国はどうですか?





コウ: 韓国はもっと保守的です。流行としてイタリアンなども入ってきていますが、クオリティーはそう高くありませんし、日本の影響でパティシエによるお菓子作りも始まりましたが、まだ洗練されていない印象を受けます。基本的にはみんな昔ながらの韓国料理を食べていますからね。

――海外を旅されて、人々と音楽との関係に何か印象はありますか?

コウ: 昔ながらのその国の音楽、いわゆる民族音楽を大事にしているな、とは感じます。日本のようにアフリカの音楽が聴けたり、K-POPが町で流れていたりすることはありません。大都市に行けば可能かもしれませんが、ちょっと地方に行ったら他の民族の音楽などを耳にすることはできないと思います。インドで日本料理店に入ったら、流れているBGMはインド音楽でしたよ。

日本らしい伝統的な和食とは?

コウ:極論を言ってしまうと、やはりごはんとみそ汁です。 僕はふだん質素な食生活をしていますし、塩むすびとみそ汁 があれば、他に何もいらないくらいです。

日本は、「米」と「だし」の文化です。

この海に囲まれた日本では、鰹節を丁寧に処理して干して 鰹節にし、それを削ってだしにします。日本ならではの世界 です。きめの細やかな鰹節でだしを取れば、もう、なんでも うまいですよ。それと米。米のうまさは世界でもトップです。 「おふくろの味」の代表格ともいえる「肉じゃが」は、明治以 降に、牛肉を食べるという文化が外国から入ってきてでき たもので、それが今や「おふくろの味」というのもすごいこ とですが、僕はもっともっと昔から食べられていたごはんこ そ、「おふくろの味」だと思いますよ。みそ汁もまた、北海道、 東京、東海、関西、九州で味が違うというおもしろさがあり ます。僕は日本で初めて行った土地ではみそ汁を必ず食べる ようにしています。

音楽で考えると、米やだしに相当するようなものはなんで しょうね。地域に根ざしたお祭りの音楽とか、長く伝わる民 謡などかもしれないですね。

――地域の風土や自然環境から成り立っているものを大切に するということでしょうか?

コウ: そこを無視して、この先日本は前へ進めないように思います。絶対に大切にしていくべきです。海外では郷土色を本当に大切にしています。外国のいろいろなものを受け入れながら郷土も大事にしていくことができれば、すばらしいと思います。

ではんとみそ汁は日本人の食を支える大切なものですが、 これが日本全国どこでも同じ味だというのも、味気なく寂し いことです。その土地に根ざしたものは取り入れ続けていき たいですね。

インスタント食品とのつきあい方

コウ:自然を大切にしたり、自然と関わり合ったりすることが必要だとはいえ、やはり時代とともにライフスタイルも変化していますので、インスタント食品を100%否定することはできないと思うんです。それによって助かっている人もいますし…。ただ、子どものときにだしの味を知るということが大切なのには意味があります。

トルコのことわざに「飯を食べるところに帰ってくる」というものがあります。つまり、生まれて初めてごはんを食べた土地に必ず人は帰ってくる、ということです。日本はだしの文化をもち、だしのうまみを感じられる舌はすごく繊細です。欧米人はだしのうまみがなかなか理解できず、うまみはバターや生クリームなどのカロリーで補います。うまみをだしで補うという繊細な感覚は日本人特有のものです。

それなのに、子どもの頃からインスタント食品の味覚になれてしまうと、だしのうまみを識別できなくなってしまいます。子どもの頃にだしのうまみをしっかり味わって育てば、僕もそうでしたが、思春期にジャンクフードに走っても、大人になったときにきちんと味覚が戻るんですよ。子どものときにちゃんとだしの味が分かっていたら、やっぱりだしがうまいなと思えますが、それができていないと、一生ジャンクフードがおいしいと思う舌になってしまいます。それは、せっかくこの繊細な舌をもって日本人として生まれたのに、もったいないことですよ。

インスタント食品を100%シャットアウトするわけではありませんが、日本食のもっているよさを認識しつつ、インス

タント食品やコンビニ食とうまくつきあっていく環境を整えることが大事だと思います。例えば冷凍食品には、野菜をプラスするのがいいと思います。冷凍食品の野菜は、野菜としての栄養価が死んでしまっているんです。だから調理過程で少しでも野菜をプラスすればいいと思いますね。

---昔から歌い継がれている童謡や唱歌などは、たとえ文語 調で歌詞の意味が分からなくても、子どものころに歌わ せなさい。そうすれば将来きっと心の支えになるだろう とよく言われますが、同じことでしょうか。

コウ:そうですね。小学校や中学校の音楽の授業のとき、「なんでこんな歌を習わないかんの?」と思ったことがありました。でも大人になって『しゃぽん玉』の歌詞の意味を知ったときとか、旋律のよさに気がついたときとか、「ソウルフード」ではありませんが「ソウルミュージック」だと感じるんですよね。

コウさんからの ワンポイント・アドバイス

忙しい人のためのだしの取り方

だしの取り方は、和食の先生たちにさせるとたいそうなことになってしまう奥の深い世界です。僕も時間がないときは、お湯をわかしてそのまま鰹節をバッと入れてすぐ火を止めます。しばらく置いて、鰹節が沈んできて色が変わったなと思ったらそのままスプーンなどでピッとすくってだしを出します。こさなくてもいいですよ。それだけでじゅうぶんです。もっと気軽にだしを取ってほしいですね。



こう・けんてつ(高賢哲)

大阪府出身。料理研究家である母・李映林主宰のeirin's kitchenにてアシスタントを経験後、2006年に独立。

韓国料理を中心に、素材の味を生かしたヘルシーなメニューに定評がある。 現在は雑誌や本、テレビ、ネットコンテンツ、イベントなど多方面で活躍中。 請演会などでは自身の経験をもとに、家庭での食のあり方、食を通してのコ ミュニケーションを広げる活動に力を入れている。

子もり歌のように

前田美子

針仕事の手をせっせと運びなが ら、時折しごく糸の音を楽しむようけなかったと悔やんでいたが、字は に、祖母はよく歌っていた。歌うと 独学で書いていたし、四人の息子を いうより、誰に語るわけでもない独 り言のようでもあった。

「そうだ、そうだ、そうだった」「あ の着物もほどいて洗い張りをしよ うね」

――だまって側で見ている私に、突 いて見ていた。 然会話が降ってくる。

「なん?」と聞き返すと、もう祖 母は反物をスースーと膝の上をす べらせ、縫い物の世界に没頭してい る。こんな時に口ずさんでいる歌 は、どこまでがどの曲でどんな歌な のか、あっちこっちと交差していての子もすぐに眠ってね……あんた (おばあちゃんの歌は変だ)と思っ のお父さんもそうさ! 」と針を止 たりもした。

「天神様の石段は…」「おひとつ おふたつ それそれ もひとつ…」

りに楽しそうだし、手もとがそれに 遠慮をしていた。

祖母は、小学校も途中までしか行 一人で育て上げた。それも針仕事一 筋で。自分の歌に合わせ、トントン トンと、長い反物が袖になり、襟が 付き、見る間に着物の形になるのは 楽しかった。飽きもせず側にくっつ

変な歌だと思いながらも、私の身 体に溶け込み、時々口ずさんでいる 自分がいた。

「歌、好き?」と祖母にたずねると、 「夜なべをしても歌を歌うと眠くな らんし、この歌で子どもたちは、ど め、眼鏡の奥で目が笑う。

「女はどんな無口な人も子どもが 生まれるといつの間にかあやした 「何の歌?」と聞きたいが、あまり、風呂に入れたり、子どもと一緒 にいるだけで、おしゃべりになるの 合わせて動くので、子どもながらに さ!寝かしつける時、トントントン と背中をゆすって歌うのさ。だから



歌が苦手なんて人はいないさ。私も そうさ、子どもが眠る姿は、本当に 天使だからね。子もり歌は、いいも んだね……あんたもそうなるさ、わ たしに似てるもんね」

働き者だった祖母は、身体が思う ように動かなくなっても、布団の上 に座って、手鞠に色とりどりの糸を 刺し込んでいた。95歳で他界した。 音程も定かでない、歌詞もいい加減 な所が多い歌だったのに、なぜか心 に残る節まわしが、私の中に風のよ うに聞こえ包み込む。

歌うって何だろう。

この祖母の生活そのものに、歌が 織り込まれていた日々を思い出す。 今は生活の中に生きる歌を、ごく 自然に口ずさんでいる姿があまり 見られなくなったのでは……。CD もiPodもコンポもいい。ただ祖母 のそれのように肌で感じる音は、強

い優しさとして残る気がする。

思わず歌を口ずさんでいる学校 帰りの子どもたち。

遊びの中に歌が弾んでいる、わら

空気のように、気付かずこぼれる 歌を、もっともっと音楽室からも 発信したい。一生の宝物になるよう な、そして流れる時の中で暮らしに 寄り添うような、そんな歌心を探し たい。

まえだ・よしこ

東京都葛飾区立南奥戸小学校を振り出しに、板橋 区、青梅市、武蔵野市の小学校で、子どもたちの歌 う心をやさしく育ててきた。

現在、東京女子体育大学講師。むさしのジュニア 合唱団「風」指揮者。 全日本合唱教育研究会理事。 著書に『子どもと歩く』『レパートリーを広げる小学 牛の合唱(CD付楽譜集)』(音楽之友社)、『卒業式の うた1』(共編: 教育芸術社)などがある。

同声合唱曲集 卒業式のうた1

○前田美子先生、丸山久代先生、室屋尚子先生 の編集による、卒業式に歌える合唱曲で構成 した曲集です。前田先生による各曲の解説を はじめ、エッセイやコラムも掲載。 続く第2集も2013年夏に発行の予定で



[楽譜]定価1,260円(税込み) /B5判/56ページ/全10曲 ISBN: 978-4-87788-574-8 [CD] 定価2,940円(税込み) ISBN: 978-4-87788-575-5



Inf8rmation o

2013年に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研 究 大 会

6月 June

●20日(木)・21日(金)

平成25年度 全日本音楽教育研究大会全国大会 兵庫大会(総合大会)

第55回近畿音楽教育研究大会

大会主題 「つながる 音・人・心」

兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホール (西宮市) 他

事務局 兵庫大会実行委員会事務局

神戸市立明親小学校 校長 長永憲和 〒652-0896 神戸市兵庫区須佐野通4丁目1-19 TEL 078-651-2855 /FAX 078-651-2856

E-mail:nor-osanaga@sch.ed.city.kobe.jp 全日音研兵庫大会情報ページ:http://www2.kobe-c.ed.jp/on-es/

8月 August

●14日(7k)

第35回全日本合唱教育研究会全国大会調布大会 大会テーマ 「繋げる歌の力 広げる合唱の輪」 講師 大田桜子、松井孝夫、横山潤子、若松 歓 他 東京都調布市グリーンホール大ホール 事務局 全日本合唱教育研究会事務局

〒191-0065 日野市旭が丘2-42

TEL 042-583-3905 / FAX 042-583-3915

日野市立日野第四中学校 三木美紀

10月 October

●11日(金)

第55回北海道音楽教育研究大会 旭川大会 全道共通主題 「音楽のよさを生かし、豊かな心と確 かな力をはぐくむ音楽教育」

旭川大会主題 「豊かな感性と確かな力をはぐくむ音 楽教育の創造」

旭川市民文化会館大ホール 他

事務局 旭川市立神居東小学校内 佐野信孝

〒070-8011 旭川市神居 1 条17丁目 TEL 0166-62-2932 / FAX 0166-62-2720 E-mail:koutvou@kamuihioashi.els.asahikawa-hkd.ed.jp

●24日(木)・25日(金)

第54回九州音楽教育研究大会 福岡大会 平成25年度福岡県音楽教育研究大会

大会主題 「味わおう 音楽のよさや美しさ 伝えたい 心をつなぐ音楽の喜び(仮)」

記念講演 藤原道山(尺八奏者)

アクロス福岡シンフォニーホール 他

事務局 福岡市立香椎第三中学校 岩木美詠子

〒813-0012 福岡市東区香椎駅東3丁目33番1号 TEL 092-662-7668 / FAX 092-662-8456 E-mail: czr03750@nifty.com 11月 November

●1日(金)

第61回東北音楽教育研究大会 仙台市大会 第49回宮城県音楽教育研究大会 仙台市大会 宮城県高等学校音楽教育研究会秋季大会 仙台市大会 大会主題 「つなげよう音を つながろう人と ~音楽の力で 明日の笑顔を~」

仙台市青年文化センター、仙台市旭が丘市民センター 事務局 仙台市立西山小学校 教頭 高橋純子 〒983-0823 仙台市宮城野区蒸沢2-23-1 TEL 022-252-0570

●8日(金)

平成25年度 第55回関東音楽教育研究会 群馬大会 大会主題 「心ふれあう 豊かな響き 〜感性を豊かに働かせながら音楽活動の喜びや楽しさ を味わう学習を目指して〜」

前橋市内各小中学校・前橋市民文化会館 問い合わせ先 前橋市立芳賀中学校 校長 清水 正巳 (「群馬大会」準備委員会副委員長) TEL 027-269-5829 / FAX 027-269-5819

●15日(金)

第44回中国・四国音楽教育研究大会 山口大会 大会主題 「伝えよう音楽 つなごう心」

防府市公会堂 他

問い合わせ先 防府市立富海中学校 教頭 上田良夫 〒747-1111 防府市大字富海1246番地の1

TEL 0835-34-0023 / FAX 0835-34-0296

スプリングセミナー2013

~新作合唱曲による公開講座~

コンクール自由曲向けの新曲を先生方にいち早くお届け する『スプリングセミナー』を開催いたします。当日は、 司会進行に藤原規生先生をお迎えして、合唱団による新 曲発表、合唱団指揮者によるレクチャー、作曲家の先生

による解説を行う予定です。盛りだくさんな内容となっておりますので、ぜひとも足をお運びください。

3月24日(日)

12時45分 ~16時40分 (受付開始12時)

津田ホール(東京都渋谷区)

※JR総武線千駄ヶ谷駅より徒歩1分

会費: 4,000円(テキスト代含)

参加申込方法

- チラシに掲載のFAX専用申込書に必要事項をご記入の上、下記のFAX番号へお送りください。
- 教育芸術社HPより、スプリングセミナーページ の指示に従ってお申し込みください。URL: http://www.kyogei.co.jp/

出演: 長岡利香子 指揮 八千代少年少女合唱団 古橋富士雄 指揮 レガーロ東京 harmonia ensemble 鈴木輝昭、横山潤子、藤原規生(司会)他

問い合わせ:

スプリングセミナー実行委員会(教育芸術社内)

TEL: 03-3957-1176 FAX: 03-3957-1174 MAIL: info@kyogei.co.jp